

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ミュンスター平和研究イニシアチヴ
Author(s)	トーレン, エリック
Citation	ぶらくしす , 23 : 45 - 52
Issue Date	2022-03-31
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/52231">10.15027/52231</a>
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052231">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052231</a>
Right	
Relation	



# ミュンスター平和研究イニシアチヴ

エリック・トーレン（ミュンスター平和研究イニシアチヴ）

訳：金田瑞樹

おはようございます、そしてこんにちは。初めに「ミュンスター平和研究イニシアチヴ」（Münster International Peace Research Initiative）、縮めて MIPRI の活動をご紹介できる機会を与えてくださった主催者の方々に感謝します。私はエリック・トーレン（Erik Tolen）といい、MIPRI のプロジェクトコーディネーターをしています。分子生物学者として教育を受けましたが、今年初め大学の運営に移りました。今日の講演で MIPRI とミュンスターの街の歴史を伝えられることを楽しみにしています。

まず初めに MIPRI はミュンスター大学国際室の一部であるウェルカムセンター（Welcome Centre）のプロジェクトです。私たちはドイツの連邦教育科学研究技術省のリサーチ・イン・ジャーマニー・プロジェクト（Research in Germany project）に沿って資金提供を受けています。この大きな助成金は 2021 年にミュンスターを平和と紛争の研究の地として知名度を高めることを目的として授与されたものです。今日が MIPRI の初めての公的な講演であることを嬉しく思います。MIPRI のパートナーである広島大学と一緒にを行う事を光栄に思います。このワークショップの主題「記憶」に沿って、MIPRI がミュンスターの街にとっても適している理由についてお話しします。

まずミュンスター大学のウェルカムセンターについてもう少し詳しくお話したいと思います。ミュンスター大学は、しっかりと練り上げられた国際化戦略によって国際的に発信されている強力なブランドです。ウェルカムセンターは学長及び各学部への戦略展開に関する助言という役割を通じて、国際化戦略において重要な役割を担っています。ウェルカムセンターはミュンスター大学のブランドを広めるために全体として三つの方法を提供しています。一つは新たにミュンスターにやってくる科学者のためにウェルカムセンターとして活動することです。私たちはゲストハウスでの住居の提供や、ミュンスターへのアクセスに関するアドバイスやガイダンスを提供することで、この活動を続けています。私たちはこれをポストドクレベルから行っています。さらに、ヨーロッパ内のスタッフの移動に焦点を当てたエラスムス・プログラム（Erasmus program）の枠内で大学のスタッフの移動に関連する要望の手助けをすることもあります。最後に今日重要なことですが、私たちは二つのプログラムと一つのプロジェクトを通して個人向けの研究マーケティングを提供しています。私たちのミュンスター大学 OB のための同窓研究プログラム（Research Alumni program: ReAL）では、外国人研究者の方々に、彼らの出身大学駐在のミュンスター大学大使として

の役割を課し、本国の他の研究者にミュンスター大学での活躍の機会について伝えるマルチプレイヤーとして活動してもらっています。次に、研究助成金を通じて女性研究者を支援するウーマン・イン・リサーチ・プログラム（Woman in Research program: WiRe）があります。最後に、平和と紛争の研究の地としてのミュンスターの知名度を高める活動に携わっている MIPRI です。私たちは、三つの柱でこれを達成することを目指しています。一つ目は国際的に優れた若手科学者に贈られるミュンスター平和研究賞。二つ目は私たちが PeaceHUB と呼んでいるデジタル交流プラットフォーム。三つ目はミュンスターの地域社会です。これら三つの柱は、ミュンスターという街が持つ豊かな歴史によって統一されています。

MIPRI とミュンスターの歴史に触れる前に、皆さんの中にも名前をお聞きになった方がおられるかもしれないある人物から聞いた話をしたいと思います。私たちのイノベーションセンター（AFO）のヴィルヘルム・バウフース氏（Dr. Wilhelm Bauhus）は、2017年3月、2018年2月、2019年3月と、何度も広島に滞在しています。その際バウフース氏が AFO を代表し、原爆ドーム前の広島川〔下線部はママ〕で採取された遺物を受け取るという光栄に浴しました。これらの遺物は AFO の部署内に展示され、折り鶴やアイデア・マイニング・プロジェクト（Idea-Mining Project）に関する両大学の公式パートナー協定書とともに紹介されています。AFO に展示されているこれらの素晴らしいものたちは、広島大学とミュンスター大学の特別なつながりを象徴しています。それは広島での悲劇がミュンスターで記憶される一つの方法なのです。またバウフース氏はミュンスター市が広島のカトリック大聖堂に寄贈した「十字架の道行き」を描いた素晴らしいテラコッタの板についても教えてくれました。

さて、話題が変わりますが MIPRI についてお話ししたいと思います。まず私たちのロゴと掲げている課題について紹介したいと思います。

ミュンスター国際平和研究イニシアチブ（MIPRI）はウェストファリア平和条約の調印以来、平和構築の知的、地理的拠点としてミュンスターが受け継いできた遺産を継承する。MIPRI 平和研究賞は国際的な若手研究者による平和および紛争研究における未来志向のアイデアを促進し、PeaceHUB は、地域、国内および国際的に活躍する人々との間の平和研究および平和構築についての交流を推進するものである。MIPRI は、持続可能な平和構築の取り組みに対する科学および社会の潜在能力を支援し団結させるものである。

すでに述べたように、MIPRI は三つの柱で成り立っています。まず、若手科学者のための研究賞。二つ目は科学者同士の交流を可能にするデジタルプラットフォームである PeaceHUB ですが、それは科学者ではない三つ目の柱であるミュンスター市民の参加と対話も目的としています。最後にプロジェクトの基盤であるミュンスターの歴史です。MIPRI

は紛争と平和構築の豊かな歴史を持つ場所としてミュンスターの遺産を記憶に残したいと願っています。この遺産は、研究者や地域社会にインスピレーションを与えることができ、それによって私たちは人々が研究、対話や他のコミュニケーションに進んで関わろうとする潜在能力を引き出そうと考えています。最終的にそれは平和と紛争研究の分野における喫緊の課題に対して持続可能な解決策を導き出すことにつながるはずです。

本日は「記憶」というテーマで、「なぜミュンスターなのか？」という問いに焦点を当てたいと思います。ミュンスターには、1648年に締結されたウェストファリア条約に代表されるような長い歴史があります。まずミュンスターという都市について簡単に紹介しましょう。ミュンスターの街は、793年にカール大帝がザクセン人を改宗させるために、現在の聖ルドゲルスと呼ばれる人物をこの地に送り込んだことが端緒をなすとされています。聖ルドゲルスは、街を流れるアー川のほとりに修道院（ドイツ語でモナステリウム（monasterium）、これがミュンスターの名前の由来）を建てました。その修道院は今でもミュンスターの中心に堂々と建っています。805年、ルドゲルスはミュンスターで最初の司教に叙階されました。797年にはすでに、現在も活動中のギムナジウム・パウリヌム（Gymnasium Paulinum）と呼ばれる修道院付属の学校を始めています。今日ミュンスターはドイツにおける自転車の街としての魅力もある街です。

ミュンスターで最も有名なのは1648年10月のウェストファリア条約調印です。次のスライドでは、ミュンスターの歴史と素晴らしい遺産についてご紹介します。最後に、「なぜミュンスターなのか？」という疑問にお答えできればと思います。この絵は、レミギウス・ホーゲンベルク（Remigius Hogenberg）が1570年に描いたミュンスターを南西から見た絵で、真ん中にミュンスター大聖堂が描かれています。聖ランベルティ教会にある檻は、ミュンスターにおける暗黒の時代を想起させる残酷な遺産となっています。1530年代の急進的な宗教改革の最中、再洗礼派ヤン・ファン・ライデン（Jan van Leiden）はオランダからミュンスターに移り住みました。彼はヤン・マタイス（Jan Mathijs）とともにカトリックを非合法化し、金銭や財産を持つことを禁止した共同体を設立しました。1536年1月、ミュンスター、オスナブリュック、ミンデンのフランツ・フォン・ヴァルデック司教領主（Prince Bishop Franz von Waldeck）とルター派のヘッセン方伯（Landgrave of Hesse）が率いるカトリック支援軍の力によって再洗礼派は呪われた運命を辿ることになりました。再洗礼派の王ヤン・ファン・ライデン、副王兼死刑執行人ベルンハルト・クニッパードリング（Bernhardt Knipperdolling）、そして再洗礼派首相ベルンハルト・クレヒティング（Bernhard Krechting）は拷問され処刑されました。彼らの遺体は、市民を恐怖させるために聖ランベルティ教会の塔に吊るされた檻の中に入れられました。1585年まで、死体の肉が崩れるほどになっても彼らの体は檻の中に市民への戒めとして残されました。これらの檻は今でも教会の塔に吊るされています。

それから約80年後の1618年、神聖ローマ帝国内では恐ろしい戦争が勃発しました。この戦争は現在では三十年戦争という名で知られています。三十年戦争に至るまではケルン

戦争やドナウヴェルトの十字旗の戦いなど、帝国内の小地域での紛争が本格的な戦争に発展していました。このほかにもさまざまな紛争、対立、不和が発生し、いわゆるボヘミア反乱のきっかけとなる事件が起きました。1617年、フリードリヒ 5世 (Frederick the 5<sup>th</sup>)〔下線部はママ〕がボヘミア王に選出されたのです。フリードリヒ 5世 (Frederick the 5<sup>th</sup>)〔下線部はママ〕は保守的なカトリック教徒であり、プロテスタントの貴族たちからは総じて不人気でした。そしてプロテスタント貴族が自分たちの権利が損なわれることを懸念し、ボヘミア反乱を引き起こしたことで三十年戦争が始まりました。ここでボヘミア反乱の後起こった重要な出来事と三十年戦争の全体像を、非常に凝縮された形ではありますが紹介しましょう。当初紛争は中央ヨーロッパの各地域で起こっていましたが、それも長くは続きませんでした。スペインはカトリック側に早くに加勢しましたが、オランダの奪還を優先しプロテスタントの拠点との争いを避けることを望んでいました。1620年白山の戦い (battle of the White Mountain) でプロテスタント派が敗れた後、選帝侯たちはボヘミアを平定したフリードリヒ 5世 (Frederick the 5<sup>th</sup>)〔下線部はママ〕を見捨てることにしました。これがボヘミアの反乱の終焉となりました。選帝侯たちは戦争をボヘミアに限定するつもりでしたがこの計画は見事に失敗しました。

三十年戦争はヨーロッパの歴史上、最も破壊的な戦争の一つであり、ドイツのいくつかの地域では人口が50%減少しました。興味深いのは、この三十年戦争によって12年間休戦状態にあった八十年戦争が再燃したことでしょう。やがてヨーロッパの他の地域もこの戦争に深く関与し介入を開始する必要があることとなったのです。デンマーク、スウェーデン、スコットランドがプロテスタント派に加勢したシュトラールズント攻囲戦 (siege of Stralsund) を描いた当世風の彩色版画に見られるように、まずデンマークが、その後スウェーデンが戦闘に参加するようになりました。この時点で戦争は劇的に拡大しており、ヨーロッパ大陸のほとんどを巻き込んだものになりました。カトリックのフランスとプロテスタントのオランダとスウェーデンとの間でありそうもない同盟が結ばれるなど、この戦争は特殊なものでした。また、デンマークは1635年のプラハ条約の調印後、同盟を変更しました。ネルトリンゲンの戦い (battle of Nördlingen) の後、フランスが参戦しました。これが戦争の第二段階の幕開けとなりました。またこれがドイツを中心とした内戦の終焉、そして全ヨーロッパが戦争状態に陥ったことを意味したというのが通説となっています。これは、1647年に兵士に襲われた旅行者の画像です。背景の荒廃した風景に注目して下さい。

一般的に1640年代になると、物資や馬の餌が不足し軍事活動は大幅に制限されました。スペインは海上輸送による部隊の供給を試みましたが、オランダ軍に阻まれました。戦争の激しきは弱まり、軍隊はどんどん縮小していきました。フランス軍とスペイン軍によるロクロワの戦い (battle of Rocroi) の後、1643年6月にハンガリーのフェルディナンド3世がスウェーデンとフランスをミュンスターとオスナブリュック (Osnabrück) に招き、最初の和平交渉を行いました。しかし、デンマークによる北海航路の封鎖がオランダとスウェーデンの経済に影響を及ぼしたため、交渉は遅々として進みませんでした。和平交渉が行われて

いる間、スウェーデンはプラハに狙いを定めました。これが三十年戦争最後の戦いとなったのです。ウェストファリア条約は1648年10月24日に調印されましたが、その知らせがプラハに届くのは1648年11月になってからでした。こちらのリストにある国々がこの戦争に参加しましたが、継続的には参加しなかった国もあるのは興味深く、デンマーク、ザクセン (Saxony)、ブランデンブルク (Brandenburg) の三カ国はプラハ条約締結後の1635年に同盟を変更しました。

1648年、ウェストファリア条約と呼ばれる三部構成の協定が結ばれました。まずミュンスター条約によってスペインとオランダ共和国間の八十年戦争に終止符が打たれました。これによりオランダは独立し、オランダ王国が誕生しました。次に、神聖ローマ帝国とスウェーデンの間のオスナブリュック条約。最後に、神聖ローマ帝国とフランスとの間のミュンスター条約です。最初の討議は1642年にすでに始まっていましたが1646年に本格的なものになりました。協議はミュンスターとオスナブリュックの街で行われました。ウェストファリア条約の特徴は、初めて帝国内の国家の独立が認められたことです。これはウェストファリア主権または国家主権と呼ばれるもので、ドイツやアメリカが大きな全国的な政府の中にそれぞれの州政府を持っているのと同様に、各州はその領土に対して排他的な主権を持つという国際法の原則です。この事実が正しいかどうかは分かりませんが、ウェストファリア条約締結が国際法の始まりであるという文献も目にしました。国境を越えて認知され、受け入れられたルールは、地域や国の法律を超えたという主張です。画像は、協定調印の様子と条約調印が行われた平和の広間があるミュンスターの旧市庁舎です。調印者の肖像画が飾られています。こちらは調印後の土地分割がどのようなものだったかを表す地図です。なかなかの地図ですね。最後に、本日の講演のリサーチ中に会った、私のお気に入りの画像をお見せしたいと思います。1646年ごろ、アドリアン・パウ (Adriaan Pauw) 率いるオランダの使節がウェストファリア条約に結果的につながる和平交渉のためにミュンスターに到着するところを描いた、ヘラルト・テル・ボルフ (Gerard ter Borch) の絵です。

今からミュンスター大学のイノベーションオフィス (AFO) のプロジェクトである「X\_Orte」 (忘れられた場所) についてお話したいと思います。このプロジェクトは、ドイツが関わってきた戦争の後、忘れ去られてしまった場所を特定し光を当てるといったものです。どのような場所がどのような時代に活躍していたかは、その都度紹介していきたいと思います。この写真のように X がある場所は、イノベーションオフィスの「忘れられた場所」プロジェクトの一部であったことを意味します。一旦時間軸を戻し、1648年のウェストファリア条約調印から270年後の1914年から1918年の第一次世界大戦の時代まで、時を飛ばしてみましょ。ミュンスターには、第一次世界大戦に関連した歴史的な場所がいくつかあり、そのひとつがハウス・シュピタール (Haus Spital) です。ハウス・シュピタールはそんな忘れられた場所のひとつなのです。第一次世界大戦中ハウス・シュピタールはかつて捕虜収容所であり、戦争の間9万人以上のイギリス、ロシア、フランス、イタリア、ベルギー、ポルトガル人が捕虜として収容されました。ハウス・シュピタールは労働囚人収

容所でもあり、その跡地には収容所に抑留された多くの捕虜が眠る墓地が残されています。またハウス・シュピタルの近くにはミュンスター大学や応用科学大学の芸術学部があるレオナルド・キャンパス (Leonardo Campus) があります。そこの建物はかつて陸軍の馬上歩兵部隊の宿舎として使われていたという特徴があります。実はかつての厩舎は芸術学部の図書館となっています。当時の構造がまだ残っており、市内で最も素敵なお図書館の一つです。

次にもう 20 年時間を飛ばし、国家社会主義の台頭によりポーランドが侵略され、世界文明が直面した最も暗い時代の一つである第二次世界大戦が始まる頃について考えてみたいと思います。第二次世界大戦では多くの国が影響を受け、特に今日の聞き手の方々にとっては、戦争の影響が今日まで続いていることが分かるでしょう。広島と長崎では、原子爆弾による破壊という恐ろしい行為が行われました。一方、ミュンスターは連合軍による通常兵器による多数の爆撃によって大きな被害を受けました。ミュンスターは第二次世界大戦中ドイツ軍の戦略的拠点とされ、連合軍から大規模な攻撃を受けました。ミュンスターには多くの歩兵部隊や戦車部隊が駐屯していました。その結果、市街地の 91%、郊外の 63% が完全に破壊されました。戦後、戦前の美しい街並みを取り戻すためにミュンスターの復興は非常に真剣に取り組まれました。特に市街地は見事に復元され、プリンツィパル市場 (Prinzipal market) と呼ばれる市場の復元に市が力を入れたことがよくわかります。しかし、興味深いのはこの切妻が偽物であることです。これらは建物に付け加えられているに過ぎず実際は建物の一部ではありません。しかしこの再建によって、ミュンスターがかつての美しい街並みとなり、戦争の影は復興という前景の裏に隠されました。

もちろん、ミュンスター市外にも、ミュンスターが能動的ないし受動的に関わった様々な戦争の記憶を残すための記念碑や場所が数多くあります。この写真に写っているのは、ラウハイデ (Lauheide) の近くにある墓地で、第二次世界大戦中にこの地域で命を落としたイギリス兵が最後に眠る場所です。とても伝統的な追悼の象徴です。しかし中には、第二次世界大戦や冷戦を風変わりなもしくは珍しい方法で記憶している場所もあります。ミュンスターの北にレンゲリッヒ (Lengerich) という村があります。ここには、かつて兵器工場という形で隠されていた強制収容所であった鉄道トンネルがあります。皆さんの中にも見学された方がいらっしゃると思いますが、私もバウフース氏と一緒に外観だけですが見学させていただきました。トンネル内には使用された機材の一部が残っており、また兵器製造の過程で生じた副産物も存在しています。床に突き刺さった大きな金属片は浸食によって侵入者には危険なほど非常に鋭利になっています。森の中のトンネルの上には、AFO の X\_Orte プロジェクトで使用されている X 印の記念碑があります。十字架に書かれた文章は以下の通りです。「あなたの苦しみ、あなたの戦い、あなたの死は決して忘れられてはならない。」 ミュンスター近郊のコースフェルト市 (Coesfeld) には、強制送還されたユダヤ人のための印象的な記念碑があります。この記念碑は、チェコのテレージェンシュタット (Theresienstadt) の強制収容所に送還される前のユダヤ人たちの写真をもとに作られたも

のです。さらに「躓きの石」(Stolperstein)と呼ばれるまた違った、ミュンスターのみに基づいてはいない記念碑があります。これはアーティストのグンター・デムニヒ (Gunter Demnig) 氏によるプロジェクトです(写真参照)。彼は国家社会主義の犠牲者の最後の住所の前の歩道に、慰霊の真鍮板を設置することでの犠牲者の追悼を発案しました。ドイツ、オーストリア、ベルギー、クロアチア、チェコ、フィンランド、フランス、ギリシャ、イタリア、ハンガリー、リトアニア、ルクセンブルク、モルドバ、オランダ、ノルウェー、ポーランド、ルーマニア、ロシア、スロバキア、スロベニア、スペイン、スイス、ウクライナの少なくとも 1200 の場所で、これらの石を見つけることができます。グンター・デムニヒは、タルムードにある「人はその名前を忘れられ初めて忘れられる」という言葉を引用しています。躓きの石は、躓きの石が置かれている住所にかつて住んでいた人々の記憶を呼び起こします。ほぼすべての「石」が”HERE LIVED...”から始まっています。ひとつの「石」。ひとつの名前。一人の人。この写真はミュンスター、プラハ、アムステルダムのもので、アムステルダムの写真はアンネ・フランクと父、母、妹の「躓きの石」が描かれているものです。

第二次世界大戦から目を転じて、今度は冷戦時代に活躍し、現在も興味深い形で利用されている場所を中心に紹介したいと思います。ミュンスター近郊の小さな町ザーベック (Saerbeck) は、かつて NATO のヨーロッパ最大の弾薬庫があった町です。この地域は最近バイオエネルギーパークとして生まれ変わりました。南向きの良い角度があり光の取り込みが最適であるかつての貯蔵庫にソーラーパネルを設置することで、この地域全体がいわば巨大なソーラーパネルになっているのです。巨大なソーラーパネルに加え、巨大な風力発電機も設置されています。これらによりザーベックを中心とした地域のグリーンエネルギーが生み出されているのです。興味深いのはザーベックのコミュニティがこのプロジェクトに投資する機会が訪れ、投資した人々は私の記憶が正しければ 6 ヶ月以内に資金を取り戻し、現在その利益を共有していることです。かつての貯蔵庫は、このバイオエネルギーパーク以外の目的にも再利用されています。そのほとんどはさまざまな機関によるものであり、ミュンスター大学もそれらを利用している機関の一つで、二つの貯蔵庫を使用しています。一つは美術品などの保管庫として利用されています。もう一つは、さまざまな活動に利用されています。最近の出来事としては、現在ニューヨーク在住のドイツ人で自ら平和と対立の次元を持つアートを制作しているアーティスト、イェルク・マドレナー (Jörg Madlener) が展覧会を開催しました。2003 年のイラク戦争の最初の 5 日間を題材にしたアート作品で、「砂嵐とカサンドラ」(“Sandstorm & Kassandra”)というタイトルで展示されました。心理学の学生による世界安全保障会議のシミュレーションなど、他にも貯蔵庫でイベントが行われました。さらに、2020 年の秋には貯蔵庫で別の展覧会が開催されました。この展覧会では、アーティストのマルティナ・リュッケナー (Martina Lückener) による展示「影の痙攣」(Schattenkrampf) のシルエットが紹介されました。旧弾薬庫であった貯蔵庫の一部は、冬期の凍結防止剤を保管するために使用されています。忘れられた場所として最後に紹介するのはミュンスター・ハンドルフ (Münster-Handorf) という場所で、中

でもアメリカ空軍とオランダ空軍が使用した古い空港です。この場所にはいわゆるナイキ・エイジャックス (Nike-Ajax) 、そして後に改良されたナイキ・ヘラクレス (Nike-Hercules) と呼ばれる地対空ミサイル防衛システムが配備されていました。現在空港は放棄され、かつての空軍基地は再発見された後学校の子供たちに地理や生態学、そしてナイキ・ヘラクレス地対空ミサイルの基礎であった巨大なコンクリート板がいかに自然に支配されているかについて教えるために使用されています。

このように、ミュンスターには平和と紛争に関する大きな歴史があり、この遺産こそが MIPRI の強力な基盤になると信じています。私たちは過去に思いを馳せることで、未来に命を与えたいと考えています。そのために、私たちは交流を通じて潜在能力を活性化させ、それによって人々を対話に導き、最終的には持続可能な解決策を導きたいと考えています。ここで、MIPRI の課題の核心に立ち戻りたいと思います。

ミュンスター国際平和研究イニシアチブ (MIPRI) はウェストファリア平和条約の調印以来、平和構築の知的、地理的拠点としてミュンスターが受け継いできた遺産を継承する。MIPRI 平和研究賞は国際的な若手研究者による平和および紛争研究における未来志向のアイデアを促進し、PeaceHUB は、地域、国内および国際的に活躍する人々との間の平和研究および平和構築のについての交流を推進するものである。MIPRI は、持続可能な平和構築の取り組みに対する科学および社会の潜在能力を支援し団結させるものである。

最後に、MIPRI はドイツ連邦教育研究省の支援のもと、ドイツ研究振興協会 (DFG) から支給されるリサーチ・イン・ジャーマニーという助成金を受けていることを改めてお伝えしておきたいと思います。さらに、オスロ平和研究所 (PRIO) 、広島大学、サンパウロ大学、カリフォルニア大学バークレー校のヨーロッパ研究所という四つの優れた国際的なパートナーにも恵まれていることを誇りに感じています。また、ミュンスター大学内のパートナーであるエクセレンスクラスター拠点「宗教と政治」、科学事務局と平和事務局を通じてのミュンスター市・マーケティングからの支援もあります。さらに、ヨーロッパセンター (Centrum for Europa) 、AFO、ブラジルセンター (Centrum for Brazil) も MIPRI を支援しています。最後になりましたが、ご清聴ありがとうございました。どうもありがとうございます。